

# IARU-GSP 参加報告書

## I. はじめに

私は今年の International Alliance of Research Universities の Global Summer Program において、イェール大学の Topics in International Economics というコースに参加し、国際経済について勉強した。留学前に所属学科の国際関係論の必修科目において、国際経済の一通り勉強したことがあり、講義や演習を通してこの科目に興味を持った。また小さい頃から途上国の経済発展に興味を持ってきた。そのため、アメリカにおいてより多くの、新しい知識を吸収し、見方に触れ、理解を深めたいと考え、この度の参加を決めた。

当報告書では、まずイェール大学での5週間にわたる勉強や生活について紹介し、続いて GSP を通じて自らの学習、国際理解への意欲に関する変化について述べる。最後に GSP での留学経験を受けて、次の留学に向けての思いを簡単に述べ、結びとしたい。

## II. イェール大学での生活

このイェール大学での5週間は、自分の限界に挑戦し続ける期間だったように思われる。というのも、大学4年になり、ふとこれまでの自分の人生を振り返ると、私は限界に挑戦したことがなかったことに気がついた。どんなことに取り組む時も、私はつい自分にできる限界みたいなもの想定してしまい、できる範囲以上のことには取り組んでこなかった。だから、大学卒業を前に自分の限界を超えてみたかった。そして IARU-GSP というチャンスに恵まれ、私はアメリカという異国の地で、自分の限界に挑戦することとなった。世界中から集まった一流の学生たちと一緒に、一流の先生のもとで、英語でグローバルスタンダードの国際経済の勉強をすることがとてもチャレンジングに思えた。

しかし、それは想定以上のものであった。事前に届いていたスケジュール表を見る限り、授業は週3日、一日2時間で、比較的余裕のあるプログラムだという印象を持っていた。新しい環境と新しい友人に囲まれて、勉強に励みながらも、休日は観光できらるうと単純に考えていた。そのときの私にはアメリカの大学の厳しさというものを知らなかった。

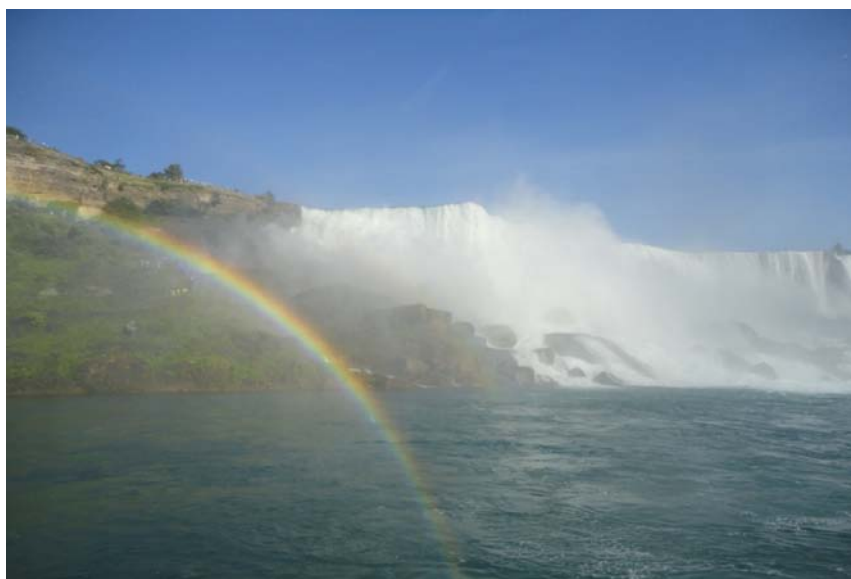
到着してすぐに寮が割り当てられ、アメリカ人や韓国人、シンガポール人と同じスイートに住むこととなった。特にシンガポール人とは同じコースということもあり、生活

を共にすることになった。そこで最初にぶつかった壁、英語であった。シンガポールの英語は「シングリッシュ」と言われるように、独特の訛りがあり、スイートメイトが何を話しているのか最初は全く聞き取れなかった。「シングリッシュ」の壁のみならず、同じコースのメンバーのほとんどが英語に堪能であり、流暢に話し、論文やテキストを読む上で言語面での問題はない。私自身も、留学前から英語に力を入れてきており、英語に自信はあったのだが、世界の学生との差を見せつけられたような気がした。

講義がはじまり、本格的にプログラムが開始するとすぐに、指導教官から容赦のないアサインメントを出された。講義は演習形式であり、アサインされた課題論文について議論を交わすものであった。毎週8本ほどの論文が課題として出され、一方で教科書も読まなければならない。週末には、これらをインテグレートして **review paper** の執筆を要求された。また同時に国際経済の理論などを扱った演習問題(**problem set**)も毎週アサインされた。週3日の授業ではあったものの、こなさなければならない課題量はこれまでに経験がないほど多かった。英文の読解には大きな問題はなかったものの、他の学生と比べてはやはりスピードが遅く、人一倍努力する必要があるがあった。授業中の議論もついていくのが精いっぱいであり、なかなか発言することができず、もどかしかった。主体的に、課題以外の文献も読み進めてさらに理解を深めたいと考えていたが、実際は課された課題をこなすだけで精一杯であった。こうして、毎日他の学生よりも早く起きて論文を読み、講義の時間以外は基本的に寮にある図書館に行って夜まで勉強する日々が始まったのである。

課題に追われていると徐々に、イェールでの生活リズムに順応しはじめた。毎週の課題は相変わらず大変だったが、しかし自分の限界を超えたいとの思いで留学に来ており、スイートメイトやほかの友だちも夜遅くまで勉強していたため、切磋琢磨の思いで必死にこなした。課題を読むペースがあがったのをとても実感できた。**Review paper** も **problem set** も合格することができ、諦めずに書いた甲斐があった。

そこで3週目の週末には、同じ寮で仲良くなった友だちと一緒に、ナイアガラの滝へ一泊二日の旅行へ出かけた。遊覧船に乗り、滝を近距離から眺めたのはとても感動的で、友だちとコミュニケーションを深めることもでき、大変有意義な時間を過ごせた。とはいえ、課される課題が多いのは変わらない事実。旅行の間も、長距離のバス移動ということもあり、みんなで課題文献を携帯し、行き帰りのバスの中で、車酔いと闘いながら、論文を読み進めた。旅行中も英語文献を必死になって読むのは、今回の IARU-GSP だけであろう。



ナイアガラの滝。筆者撮影

ナイアガラのほか、プログラムの一環としてコース全員でニューヨークを訪れ、国連を見学し、国連職員からお話を伺った。普段の観光では見ることのできない場所に足を運ぶことができ、国連総会が開かれるカンファレンス・センターでは特別に写真撮影が許された。国連職員からは、紛争の背後にある経済の要因をお話いただき、大学の授業で勉強することとはまた一味違う視点に触れることができた。



ここで国連総会が開かれる。 筆者撮影

プログラムの終盤では、**term paper** に力を入れた。これまで学習してきたものを踏まえた上で、自ら関心ある国際経済にまつわるテーマを設定し、A4 用紙 15 枚以上で書けという課題であった。残り 1 週間強の間で、しかも英語で 15 枚も文章が書けるのだ

ろうかと、非常に頭を抱えた。しかし、ここで今一度「限界を超える」という自分の目標を思い出し、自分を奮い立たせた。私はこれまで開発経済に関心を寄せてきており、今回の国際経済のプログラムを通じては、成長著しい中国の圧倒的な存在感と影響力を感じ取ってきた。そこで、term paper では中国に触れ、government intervention と経済成長を軸にテーマを設定し、時間の許す限り必死に執筆した。無事に term paper を提出し、5週間のプログラムを終えたときには、これまでに感じたことのない達成感を味わうことができ、充実感に浸った。5週間共に頑張った仲間と別れるのはとても悲しかったが、いつかまた絶対に再会できることを誓った。

### Ⅲ. 学習、国際理解への意欲に関する変化

イエール大学での GSP に参加する前は、東京大学での学問に励み、現在のグローバル化の流れに乗るために、語学にも力を入れてきた。英語の講義にも積極的に参加し、自ら関心をもっている開発経済を軸に講義を多数受講し、勉強してきた。しかし、今回 GSP に実際に参加して、それがまだまだ足りてはおらず、世界の学生と比べてまだまだ努力をしないとイケないと痛感した。また演習形式の授業形態ということもあり、積極的な発言が求められたが、自分にこれが一番足りなかった。残りの学生生活の中では、積極的に考え、発言をしていきたいと思う。

グローバル化が加速度的に進展する中で、今後日本の未来を担っていく私たちは、同世代の世界の学生と対等に渡り合っていくことになる。そうした際に、意見をはっきりと主張するという意識・態度の違いは、また主張することができるという能力は、数年後、数十年後に大きな差になって現れる。これによって、日本があらゆる面で大きく引き離される時代がいずれやってくるかもしれない。日本の国際社会におけるプレゼンスを高め、世界のどこにいても自分が日本人であることに誇りを持っていける国にするためにも、この大学生という期間に、自らの意見をしっかりと持つ人間性をはぐくみ、自らの勉強方法を改善していく必要があると感じた。

日本人と他国の学生の賢さを単純に比較することはできないが、欧米などのトップ大学とされる大学に日本人が圧倒的に少ないことから、学力レベルにおいて日本が世界に遅れをとっている点は否定できないであろう。この夏のイエール大学だけを見ても、中国人学生が圧倒的に多く、日本はとても少なかった。イエール大学国際課の先生もおっしゃっていたが、日本はこれからもっと変わっていかなければならない。学生はもっと世界へ出ていかなければならないと思う。東京大学がグローバルスタンダードに合わせて、9月を新年度とするのは良いきっかけになるかもしれない。制度の改革には困難は必ず付きまとうが、ぜひ実現してほしい。今回の GSP では、国際的な教育事情への理解が深まったと同時に、常に世界に目を向けて勉強に取り組んでいく必要性を改めて感じた。

#### IV. 次の海外留学への関心

5週間という長いようで短かったイエール大学への留学は、世界中から訪れた学生と肩を並べて切磋琢磨し、ネットワークも大きく広げることのできる有意義なものであった。そしてアメリカという国、そして他国の価値観についての理解も、わずかながら深まったように思われる。特に授業中 EU のことについてヨーロッパから来た学生たちが熱く議論していたことが印象深い。これまであまり EU に詳しくなかったため、その文化や現状をすこし垣間見ることができた。また、今回の私自身の留学の目的である、「自分の限界を超える」ことができ、充実した生活を送ることができた。これと同時に、自分の勉強に関するこれまでの意識や態度についても改めて考えさせられた。帰国後は、残りの学生生活のなかで、今回の留学で得られたものをしっかりとフィードバックして、卒業論文に活かしたいと考えている。この度の留学で私自身の知的好奇心はさらに刺激され、今後はぜひまた海外の大学院へ留学したいと考えている。その際は、この度の GSP での経験を活かして、新たな姿勢で国際経済、開発経済の勉強をさらに進めていきたいと考えている。

終わりに、こうした貴重な勉強の環境や、私の知見を広げる機会を与えてくださった東京大学、日本学生支援機構、並びにイエール大学に感謝の意を示したい。

# Report on IARU2011

Course : Topics in International Economics hosted by Yale University

## **About the course:**

From attending the Global Summer Program, I can see that Yale University attaches quite much importance to the program. Following the theme of IARU, the course had expected us to enhance international communications, to develop shared positions on key public policy issues, and to share research abilities, viewpoints with different backgrounds between the top 10 universities all over the world.

The course covers recent developments in international economics. Trade policy and market structure; the economics of trading blocs such as the EEC & NAFTA; the economic consequences of continued U.S. external deficits; globalization and inequality; exchange rates, interest rates, and volatility; speculative capital flows and exchange rate policies; and financial crises and the prospects for the European Monetary Union.

The course was quite intensive. Although we had only 3 classes every week, we have to read about 9 pieces of some famous papers on the topics every week, submit 3 short discussion papers about 6 pages and a major term paper on a selected economic problem and/or issue pertaining to the international economy. I finished all the homework requested above, with 3 discussion papers, 3 math problem sets and one 20 pages term paper. I got the grade with a B+ with the score of 87 for this course. I was not able to get an A in the end, but I am quite satisfied with my grade. I think the course is somewhat hard for a student whose major is not exactly macroeconomics and who had never have experience in taking a course in the U.S.. I am still so excited to recall the first week; I struggled to finish the 3 reading papers, one problem set and one discussion paper all over the weekend. I did it, however I only got a check-minus for the grade of the discussion paper. There are classmates from Singapore getting a check-plus. Since totally there were only 20 students, each two of which were from one of IARU universities, we can say all attendants are elites. Realizing I am a delegate of the University of Tokyo, I am honored to be on behalf of our university and hope I can make a great achievement in the course. I was a little bit frustrating, when seeing the result of the first homework, but I did not give up. As a delegate of University of Tokyo, I did not want to let others think that students from this university are not qualified for the course or something else. I talked with the professor, letting him point out my drawbacks, where I should improve, referred to the papers with check-plus, and rethought about my discussion paper. I stayed in Pierson College library to study hard, and sometimes studied together with

classmates, we had a lot of discussions about the classes, which helped me to understand the classes more. In the later two discussion papers, I made improvement and got better grades.

The course was in fact a very tough one, but you can really learn how to read and analyze research papers in English academically. And you can also have a clear vision on international economy, sometimes from politics economics aspect. Also, I was quite interested in the topic on flexible currency policy written by Friedman. In the term paper, I chose to write about something on whether China's RMB should be appreciated or not, trying to give a rationale on China's government's currency policy, whether it is appropriate or not. Because I had limited time, I was not able to do a lot of field research or empirical study, I tried my best to collected related papers and analyze with the concurrent situation of China, Sino-China trade. I drew the conclusion that, judging from China's present economic development situation and other available measures the U.S. can pursue, RMB should be and eventually is on its way to appreciate in the long run, but for the time being, keeping a stable rising rate in RMB/U.S. is reasonable. From the course and the papers totally I have being tried my best to make it as good as I hoped, I think I have learned a fraction of the essence of the international economics. This is not a course teaching you English, but a course you learn international economics like a native English speaker, and you also can have the chance to discuss in a real international environment. As for me, it is the first time that I can have a class, in which I learn the knowledge in English, communicating in English, but not studying English. I use English to learn and I was able to use English to learn like a native Yale student. At the same time, I had collected different ideas reflecting the diversity of the international economy. This is where I had a feeling of achievement in the studying part of this course.

Yeah, of course, we not only studied. We also had some very wonderful fieldtrips. We had not only the welcome lunch/campus tour, and farewell dinner, but also a speech given by Elizabeth Gil from Yale's Jackson Institute for Global Affairs, Banco Santander reception & lunch; a speech on international trade between China and South America given by an international economics scholar Eva Paul, and had dinner with her. We visited United Nations in New York City and had lunch in Yale Club, where only Yale alumni can enter. All these experiences have enriched our knowledge about international economics, the situation in the U.S., South American countries and the Asian countries. We are also informed of the Banco Stantander bank's concern on supporting international research communication activities, Yale University's great coordination to IARU.

Besides these activities, daily life in Yale was also quite enjoyable. Through IARU, we were able to know smart, nice classmates from the 10 universities, who are very excellent, wise and very friendly. We had totally different backgrounds, but it did not impede our communication, our being great friends at all. We had meals, parties, and did sports together. We lived in Pierson College, where is a beautiful dormitory with fabulous library, common room and butterfly. We studied in the library, read in the common room, and played fuss ball, Ping-Pong in the butterfly. We are enthusiastic to cultures of each other's. We worked together to conquer difficult mathematic problems. We discussed with different

viewpoints on history, religions. We shared nothing in common but passion for life, dreams, adventures to see bigger world. It is only 5 weeks; we became good friends that we did not want to leave in the end. We hugged with each other to say goodbye, we promised that we could meet in the future. We said good luck to each other for our dreaming future. The program was over, but our hardworking, pursuing dreams, passion to embrace bigger world, to communicate with people with different values have never stopped.

### **Change after attending the IARU program**

Though there were only about 6 weeks I spent in the U.S. through IARU, it has broadened my views in many ways.

Firstly, I realized some common places in doing research. Since I am a graduate student in the university of Tokyo, we are required high abilities of perceiving academic papers, thinking in a logical way. We are also expected to pursue truth of academy. This is almost the same both in the University of Tokyo and Yale University. I can also imagine that it is a necessity in the 10 university and all other academic excellent universities. That is to say, it is the same standard for being an excellent scholar or doing fulfilling researches no matter where you are. However, the different place is that, in the U. S., I felt that, students study harder in college. Especially, they do much more reading than students in Asia. I heard this before, and after the program, I have to agree with the opinion.

Secondly, It is important to learn well, and to play well. As the course was very intensive, we were even unable to go out of campus in the first week. However, we overcame with improving our efficiency. We studied hard on the week time to spare time for weekend traveling around Boston, visiting Harvard, MIT. Traveling is another way to learn, especially when great partners are together with you, with whom you can learn more and share a part of your interest.

In the third place, it is not like in Japan, every one is thinking about others, i.e. to be very thoughtful. Most people, especially from the western countries, do not think about other's feeling that much. It is easy for me to have the way of thinking in the hope to be understood by others naturally like in Japan. But it is not the case. It is very important to speak out and to communicate in a frank way. All the people no matter where they are from, are very kind and willingly to talk with you. They are thoughtful too, only in a different way. As a matter of fact, I like Japanese thoughtful and hospitality, and I also like the American or European way of communication, with a little sarcasm, a little frankness. I do appreciate the diversity of the world, either frank or implicit way. You can learn from both of them, absorbing the good points, to be able to keep a good balance in your own ability of communication.

Furthermore, as a Chinese, who is studying in Japan, I had expected to learn more from an out of Asian view. Through this program, I achieved this goal. People from different part of the world, they hold different views on China, Japan, and other countries. Through talking with them, I realized what kind of images that China and Japan have in their minds. It is more meaningful and beneficial to



see your countries in your own eyes from a different stance. Talking with them help me to know China and Japan in a more objective way and make me clearer about what I should do in the future to help to improve the relationship and development for the two countries.

After this program, I think my ability and efficiency in reading papers has improved a lot, which is a crucial skill for my master study. And after this experience in the U.S., I feel like to go to study in U.S. in future. I think I will try to challenge MBA in the top Ivy League universities in five years. I still cannot say what I will do after the MBA's study; it is still not mature for me to say that. However, I am sure that it is definitely worthwhile for me to study a MBA in the U.S., from which I can continue to enjoy international communication, to make friends with wise people from the entire world. Moreover, the entrepreneur spirit, the free, fair and sometimes even bold in action moral spirit would be the next value I want to pursue in the U.S.